

北日本漁業経済学会 ニユ一スレタ一

第42回 北海道札幌大会報告

2013年11月9日(土)、10日(日)の両日にわたり、北海道札幌市・北海学園大学・国際会議場及び6号館・G-30、G-31教室において、第42回北日本漁業経済学会大会が開催されました。

今大会では「サケの資源と流通をめぐる今日的課題」と題してシンポジウムを企画し、全体で130余名の参加者を得て、下記の通り、シンポジウム、一般報告、総会および懇親会を滞りなく実施することができました。シンポジウムのコーディネーターを勤めて頂いた二平章(漁業情報サービスセンター)、総合討論・司会を勤めて頂いた清水幾太郎(中央水産研究所)、宮澤晴彦(北海道大学)の各氏をはじめ、報告者、参加者及びご協力頂いた全ての皆様に厚く御礼申し上げます。また、本大会シンポジウムは一般財団法人東京水産振興会及び一般財団法人漁業情報サービスセンターとの共同開催(第22回「食」と「漁」を考える地域シンポジウム)として実施し、さらに北海学園大学、北海道漁業協同組合連合会、日本定置漁業協会、北海道さけ・ます増殖事業協会、本州鮭鱒増殖振興会の後援をいただきました。ここに記し、関係各位に改めて謝意を表します。

シンポジウム(11/9)

会場; 北海学園大学国際会議場

共通論題; 『サケの資源と流通をめぐる今日的課題』

主催者挨拶 渥美雅也(一般財団法人東京水産振興会・専務理事)

趣旨説明 二平章(北日本漁業経済学会・会長)

〔講演〕

≪セッションI; サケ資源の変化をどう見るか≫

座長; 清水幾太郎(中央水産研究所)

○基調報告

気候変動とサケ資源

梶山雅秀(北海道大学)

○個別報告

1. 北海道における秋サケの資源動向

宮腰靖之(北海道さけます内水試)

2. 岩手県の秋サケ資源と震災の影響

小川元(岩手県水産技術センター)

3. 前期・後期来遊サケ資源と種苗法流の諸問題

高橋清孝(元・宮城県内水試)

《セッションⅡ サケ漁業と流通をどう展望するか》

座長：宮澤晴彦（北海道大学）

○基調報告

日本をとりまくサケビジネスの動向

佐野雅昭（鹿児島大学）

○個別報告

1. 秋サケをとりまく環境

鈴木 聡（北海道漁業協同組合連合会）

2. 定置漁業権の切り替えとサケ定置の経営問題

山口修司（北海道水産林務部）

3. サケ定置漁業と漁業収入安定対策事業

津田 要（北海道漁業共済組合）

《総合討論》

司会：清水幾太郎、宮澤晴彦

懇 親 会；会場…「北海学園大学・生協食堂」

参加者…約60名

一般報告（11／10）

会場：北海学園大学6号館・C-30, C31

《第1会場；C-30》

1. 海洋ツーリズムの発展状況と展望に関する研究

金 賢梅（東京海洋大学大学院）

—漁業を主体とした静岡県沼津市戸田を事例として—

2. 漁業及び海洋観光産業の海洋保護区利用における衝突の防止と抑制

—台湾の事例—

楊 清閔・頼 継昌・呉 龍静（台湾・水産試験所 沿近海資源研究センター）

3. 新規養殖業への北海道漁業関係者の期待

山下成治（北海道大学大学院水産科学研究院）

村田政隆（北海道立工業技術センター）

4. 高齢化の進んだ沿海漁村における小規模経営の存立構造

—福井県小浜市仏谷地区および甲ヶ崎地区を事例として—

芥川遼甫（福井県立大学大学院）

5. 沿海地区漁協の二面的性質に関する一考察

—山口県漁協阿川支店を事例に—

甫喜本 憲（水産大学校）

6. 昭和年代末期の秋田県における底びき網漁業減船に関する一考察

中村彰男（秋田県水産振興センター）

7. 桃浦かき生産者合同会社の経営戦略と今後の課題

立命館大学大学院 大谷美友

—周辺漁業者及び漁協との協調可能性に焦点を当てて—

8. 「水産特区」（宮城）成立過程と問題点及び課題

網島不二雄（元札幌大学）・小川 静治（榊フロム・イン）

9. 東日本大震災による地域漁業の構造変化に関する研究

—宮城県気仙沼市大島地区の養殖業の事例—

工藤貴史（東京海洋大学）

10. 東日本大震災後の三陸ギンザケ養殖復興への挑戦

清水幾太郎 (中央水産研究所)・田中津義 (水漁機構)
三浦秀樹 (全国漁業協同組合連合会)・早乙女浩一 (東北水産研究所)

11. 汚染水漏洩問題と福島県の試験操業

東京海洋大学 濱田 武士

《第2会場; C-31》

1. 北部まき網漁業におけるマイワシ・サバ類の水揚動向

金光 究 (茨城水試)

2. 90年代の日本海北部ハタハタ・底魚類の資源動向とレジームシフト

二平 章 (漁業情報SC・茨城大学地総研)

3. サンマ資源の減少が小型船の操業に与える影響について

渡邊一功 (漁業情報SC)

4. 羅臼・八戸のスルメイカの近年の漁獲と価格形成について

緑川 聡 (漁業情報サービスセンター)

5. 本州日本海側におけるシロザケ増殖事業の現状と展望

—新潟県三面川を事例として—

田嶋健明 (東京海洋大学大学院)・工藤貴史 (東京海洋大学)

6. 岩手県沿岸漁業に必要な技術開発と研究の方向性

川島滋和 (宮城大学)・新田義修 (岩手県立大学)・紺屋直樹・森田明 (宮城大学)



総会・理事会報告

本大会における学会総会は加瀬和俊氏 (東京大学) を議長に選出し、11月10日11:40より、北海学園大学・6号館C-30教室において開催されました。またこれに先立ち、11月8日には北海道大学農学部・S322演習室において理事会が開催されました。以下、主な協議内容、報告事項についてご報告致します。

(1) 新入会員承認

前回大会以降、新しく渡邊一功 (漁業情報サービスセンター)、緑川聡 (同左)、金光究 (茨城県水試)、児玉工 (水産大学校)、大谷美友 (立命館大学大学院)、大越俊也 (岩手県団体指導課)、田嶋健明 (東京海洋大学大学院)、各氏の入会が承認されました。

(2) 学会誌・短信発行について

昨年度発行の学会誌第41号は3月末発行の奥付からすると、かなり発行が遅れてしまいました。このことについては編集幹事より、丁寧な編集作業を進めるためにどうしても数ヶ月の編集期間が必要であること、そのため奥付を8月末発行に変更したいとの説明があり、了承されました。したがって本年度は、学会誌「北日本漁業」第42号を2014年8月末の奥付で発行し、短信 (ニュースレター) は従来どおり2014年1月、8月、9月の計3回発行する計画としました。

(3) 次年度大会開催地およびシンポジウムテーマの計画

次年度大会開催地・会場については、青森、秋田等、本州での開催を追求しつつ、シンポジウムテーマとの関連で設定することとしました。また、シンポジウムテーマは他分野研究者との連携や地域密着型のテーマ設定等を考慮し、今後シンポ担当理事を中心に検討していくこととなりました。シンポテーマにつきましては会員の皆様からも事務局にご意見をお寄せ下さい。

(4) 決算・予算

2012年度決算（特別会計決算を含む）につきましては、田尾、山下両監事の監査報告を含め、原案通り承認されました。また、2013年度予算案についても原案通り承認されました。以下に承認された決算書、予算書を掲載します。

2012年度 決算
(2012年10月1日～2013年9月30日)

(円)

収入の部					支出の部			
科目	内訳	決算額	予算額	備考	科目	決算額	予算額	備考
会費	個人	531,000	683,000		印刷費	469,560	800,000	会誌・封筒
	団体	280,000	260,000		人件費	0	50,000	発送作業人件費
	小計	811,000	943,000		郵送費	70,330	90,000	短信・学会誌
会誌等販売	定期	18,000	10,000	学術フォーラムから	事務費	23,531	50,000	消耗品費他
	バックナンバー	4,350	5,000	350円は送料				
	その他	0	0	大会当日販売分				
	小計	22,350	15,000					
雑収入		370		利子・利息				
特会から繰入		159,624			特会へ繰入	100,000	100,000	
寄付		100,000		近藤信義様より				
前期繰越金		2,137,958			次期繰越金	2,567,881		
計		3,231,302			計	3,231,302		

2012年度大会関係特別会計決算報告

(円)

科目(収入)		備考	科目(支出)		備考
一般会計から繰入	100,000	昨年度会計より	懇親会費	90,000	
資料費	67,000	67名分	事務費	17,276	事務局文具代・屋食代
懇親会費	93,000	31名分	人件費	15,000	シンポ講師謝金
協賛金	100,000	北海道漁業協同組合連合会	郵送費	700	大会関係郵送費
			会場費	77,400	岩手県自治会館
			小計	200,376	
			一般会計繰入	159,624	
計	360,000		計	360,000	

注:2011年度 盛岡大会(北日本漁業経済学会第41回大会)に関する収支。

2013年度 予算

(円)

収入の部			支出の部		
科目	金額	備考	科目	金額	備考
会費収入(個人)	676,000	138人(内学生7名)	印刷費	800,000	学会誌、封筒等
会費収入(団体)	260,000	17団体	郵送費	90,000	短信・学会誌等
会誌販売(定期)	10,000		人件費	50,000	
会誌販売(臨時)	5,000		事務費	50,000	消耗品費、会議費等
			特別会計へ繰入	100,000	大会特別
小計	951,000		小計	1,090,000	
前期繰越金	2,567,881		次期繰越金	2,428,881	
計	3,518,881		計	3,518,881	

注)年会費:一般5000円、学生3000円、団体1口10000円(10口1団体含む)

(5) 執筆要領の改訂について

編集委員会では執筆要領の見直しを進めてきましたが、今後編集委員会でさらに検討を進め、新執筆要領については次号学会誌（第42号）に掲載することとしました。

(6) 役員改選について

今大会で役員が改選され、以下の新役員が選出されました。

《新役員》

会 長；二平章*（漁業情報サービスセンター・茨城大学地域総研）

副会長；長谷川健二*（福井県立大学海洋生物資源学部）

理事；宮澤晴彦*（北海道大学）、上田克之*（水産北海道協会）、古林英一*（北海学園大学）
濱田武士（東京海洋大学）、清水幾太郎（中央水産研究所）
柳田洋一（茨城県水産試験場）、片山知史（東北大学）、石川傑（北海道水産林務部）
大野宣和（岩手県大船渡水産振興センター）、中村彰男（秋田県水産振興センター）
渡邊一功（漁業情報サービスセンター）、大串伸吾（日本学術振興会特別研究員）
山崎誠（東北区水産研究所）、佐々木貴文*（鹿児島大学）、三木奈都子（水産大学校）
宮入隆（北海学園大学）

監事；田尾直之（漁協経営センター）、山下成治（北海道大学）

特別顧問；末岡順（北海道信用漁業協同組合連合会）

(注) 1) *は常任理事

2) 事務局・総務・ニューズレター担当（事務局長）；宮澤晴彦
会計・組織担当；佐々木貴文 同補佐；大串伸吾

3) シンポ担当理事

二平章、長谷川健二、上田克之、古林英一、山崎誠、濱田武士、三木奈都子

学会誌編集委員会からのお知らせ

(1) 掲載料の徴収について

学会誌第42号から一般投稿論文で掲載が決定したものについて、掲載料 5,000 円を徴収します。掲載料は掲載が認められた後、速やかに学会費と同じ方法（郵便振替または銀行振込）で納入してください（振替口座、銀行口座の番号等は学会誌に記載）。

(2) 投稿原稿の送付先について

投稿規定に則り、昨年度と同様、学会誌への投稿原稿は学会事務局宛ではなく、下記編集委員会事務局宛お送り下さるようお願いいたします。なお、学会誌編集委員会の新体制についても改めて記載しておきますので、ご承知おき下さい。

<投稿原稿送付先>

759-6595 山口県下関市永田本町 2-7-1 独立行政法人水産大学校

三輪千年（北日本漁業経済学会誌編集委員会事務局・編集委員長）宛

メールアドレス； miwa@fish-u.ac.jp

<編集委員会体制>

編集委員長；三輪千年（水産大学校）

編集委員；宮澤晴彦（北海道大学），古林英一（北海学園大学），宮崎隆志（北海道大学）
長谷川健二（福井県立大学），副島久実（水産大学校），山崎誠（東北区水産研究所）
甫喜本憲（水産大学校）

編集幹事；宮澤晴彦，三木奈都子（水産大学校），大谷誠（水産大学校）

（3）学会誌第42号の原稿提出期限について

次号学会誌第42号に投稿される方は、2014年2月15日を目途に上記水産大学校・三輪氏宛、メールないし郵便（原稿1部＋FD，CD等添付）で原稿をお送り下さい（先の大会では1月末締め切りとしていましたが、ニューズレター発行がやや遅れたこともあり、編集委員会で協議した結果、提出期限をやや遅らせることとしました）。なお、メールで投稿される方も、電子媒体とプリントアウトした原稿1部をメール投稿後速やかに郵送して下さい。

また、添付して頂いた電子媒体につきましては、基本的にお返しできかねますのでご注意ください。

<大会印象記>

第42回北日本漁業経済学会印象記

立命館大学大学院 大谷美友

今回、新規会員として初めて参加させて頂いたシンポジウムの感想を以下に記載します。

第一セッションでは、近年の海洋環境の変化がサケ資源に与える影響に関して4つの報告を聴講した。宮腰氏の報告では、海区別の現状、北海道ではオホーツクを除き来遊数は減少傾向にあることを知った。高橋氏の報告では、2010年以降来遊数が減少したこと、前・後期別に来遊資源量では、温暖な海域に適した繁殖方法を有する前期群（仙台湾系）の減少率が低いことが示唆された。海温の急激な上昇、温暖化の結果サケ自体は存続の危機にあることを踏まえると、今後環境適応型（前期群）の要因解明が急がれるという。また、震災年は稚魚の放流が不可能であったことから、震災の影響は来年再来年になるということが示された。震災から徐々に生産量を回復する魚種がある一方、今後その影響が顕著に生産量に現れるサケ資源の現状を知り、改めて今後の展望を考えられた次第である。

続く第二セッションでは、サケ漁業と流通の展望に関して4つの報告を聴講した。佐野氏の報告では天然に代わり養殖サケが市場を席卷し今後中長期的にも供給過剰が予想される中、アキサケはグローバル市場においていかにして地位を確立していくのか、その必要性が示唆された。市場規模に応じて経営規模の縮小拡大が必要であり、原料生産に特化した定置網経営があつて良いという主張等は興味深く聴講した。山口氏の報告は、野付漁協が行う定置網漁場の調整、ベテランと新規参入者で利益配分に格差を設けるといった経営持分による調整や定置網漁場配置時の工夫など、漁場調整の具体的内容を知る貴重な機会となった。協業化とは網or経営体の合理化のどちらを意味するのか、また経営統合を促す際の行政責任を問う回答に関しては次回是非その詳細を伺いたいと思う。経営統合が進んでもインセンティブをつぶさない制度設計をはじめ、自身の研究課題としても多くを持ち帰ることが出来た。ここでは全報告の感想を記載出来なかったが、

フロアからの質問一つメモが進んだ濃い一日となった。

今回のシンポジウムに加え、2日目の個別報告には多くの先生方からコメントを頂きました。論文・著書を通じてしか知ることの出来なかった先生方に直接研究指導を受け、これまでとは視点の違った風を入れて頂き、第一人者の元へ行けという指導教授の言葉を痛感する次第です。本大会を通じて多くの課題を与えてもらえたことにこの場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございました。

「さけ・ます」への思い

田嶋健明（東京海洋大学大学院）

東京海洋大学へ入学以来、水産学について6年間勉強してきた中で、今回の北日本漁業経済学会が学生生活で初めての学会参加になりました。学部4年次に卒業論文として「北海道におけるさけ・ます増殖事業の現状と課題」について研究し、現在は修士論文として「新潟県におけるさけ・ます増殖事業の特質と展望」について研究しています。そのためこの度のシンポジウム「サケの資源と流通をめぐる今日的課題」での、先生方の討論は非常に参考になるだけでなく、今後の研究のモチベーションが高まりました。

私と「さけ・ます」の出会いは小学校入学前の幼少時代にまで遡ります。北海道庁水産林務部に所属する父が、北海道恵庭市のさけ・ますふ化場に勤務していた際、職員の懇親会が行われました。そこで、今回の学会でも「北海道における秋サケの資源動向」について発表された宮腰靖之様のご好意により、施設内のさけ・ますと触れ合わせていただいたことが大変楽しかったという子ども心はいまだに記憶しております。以来、釣りを通してさけ・ますと触れ合いつつ、小学校・高校と2度にわたるシロザケの採卵実習を学んでいく中で、シロザケの魅力に取りつかれ、現在の大学へ入学し、さけ・ますの研究を行うことになりました。

肝心のシンポジウムでは、セッションⅠとして秋サケ資源の造成をめぐる動向について報告され、資源造成をめぐる環境要因や本州における秋サケ資源の動向について学ぶことができました。セッションⅡでは主に社会科学の視点から、市場での秋サケの位置づけやサケ定置網の協業化などについて学ぶことができました。

一般報告では、私も「本州日本海側におけるシロザケ増殖事業の現状と展望」について報告させていただきました。報告後、清水幾太郎様より今後の研究のアドバイスをいただき、とても参考になりました。また、清水様の「東日本大震災後の三陸ギンザケ養殖復興への挑戦」では、三陸ギンザケ養殖の過酷な現状を認識しつつも、三陸ギンザケならではの特性を活かした復興への挑戦について報告され、被災から復興へ挑戦していくという力強い意志が示されたように感じました。

その他の報告も合わせて、今回の学会に参加できたことは非常に参考になりました。特にサケをめぐる今日的課題について学ぶことができ、研究のモチベーションも高めることができました。その成果を北日本の漁業生産に寄与するために、修士論文としてまとめていくことが、学会に参加させていただいた私の責務であると感じました。

北日本漁業経済学会事務局（事務局長；宮澤晴彦）
〒060-8589 札幌市北区北9条西9丁目
北海道大学大学院農学院 水産経営経済学分野
TEL 011-706-4139 FAX 011-706-3640
〒041-8611 函館市港町3-1-1
北海道大学水産学部 海洋社会科学分野
TEL 0138-40-8834 FAX 0138-40-8835
E-mail miyazawa@fish.hokudai.ac.jp

*事務局は札幌に移転しましたが、函館に郵便物を送られても届きます（返送されることはありません）。メールアドレスは従来通りです。